

仏教と表現

仏教と表現

1

仏教では、言語表現を大事にする。もちろん、言語に限らずどんな方法でもよいのだが、自分が手に入れた悟りを言葉で表現する、他者に伝えるということが非常に重視される。

禅の語録などを読んでみると、速やかに言え、という言葉がよく出てくる。それは、悟りを表現してみろ、ということであり、それができて初めて悟りを得たと言えるのである。

自分一人が悟るだけなら、そこで仏教は終わってしまう。それを他人に伝えることで、仏教は続いてゆく。だから、それをいかに表現するかが重要である。宮沢賢治の童話も、そういうものだったのと思う。あれは悟りの表現である。

悟りというものは、それほど神秘的なものではなく、現実的な一つの認識である。ある意味では、それほど大したものではない。もちろん非常に大事なもののだが、超越的なものでは全くない。それは現実にあるものである。

だから、昔の偉い坊さんはみんな悟りを開いていた。法然も親鸞も悟っていたが、本当の問題はその後にあった。それをいかにして広めるか、いかにして衆生を悟りに導くか、ということが問題だったわけ

である。それは一般的に言えば、悟りの表現の問題である。自分が知っていることをどうやって相手に伝えるか、という表現手段の問題であり、その手段の違いがそれぞれ禅となり念仏となり真言となっていったわけである。

伝えるべきことは一つである。その点が普通の表現者とは異なる。芸術家はそれぞれ自分自身を表現しようとするが、仏教徒が表現しようとすることはみな同じである。そのたった一つのことを表現するために、何万何億何兆言もが費やされてきた。それらはすべて同一の認識を伝えるためのものである。

あらゆる言葉で語り尽くされ、それでもまだ足りない。どれだけ言葉を重ねても、新しく出てくる人間のためにまた語り直さねばならない。ここに終わりはなく、その終わりのない営みの連続が仏教である。

2

最近の日本人は仏陀の教えを軽んじているようである。おそらく、自分は仏陀よりも賢いと考えているのだろう。そういう人間を馬鹿と言うのだが、自分が馬鹿であることにも気づかなくなっている。

昔よりも今の方が人間は賢くなった、という考えに根拠はない。だいたい、数千年程度で人体の構造が変わるはずもなく、人間の脳も大して変わったわけではない。だから、現代人の知性が過去の人類より

も優れていると考えるべき理由はないのだが、何事も自分が一番優れているというぬぼれのために、現代人が一番偉いと考えてる人が多いのだろう。

それがまさに馬鹿ということであって、仏教では慢、あるいは我慢と言う。しかし、仏の教えを軽んじる人は、そんな単純なことにも気づかない。馬鹿であるということは、自分が馬鹿であることに気づく機会すら奪ってしまう。無明の恐ろしさはこういうところにある。

日本の批評

1

東浩紀は日本的すぎる。彼の哲学は西洋の正統から逸脱している。彼の批評の対象からも、それは読み取れる。

しかし、どうも本人はそのことに気付いていないようである。自身の思想の異常さ、西洋的な立場から見たときの異常さに無自覚であるらしい。彼はラカンや何かについてもっともらしく語るが、思考はすぐにそこからすり抜けてしまう。西洋的な思考法が彼の中に染み付いていないように見える。たぶん彼は、そのことにもう少し自覚的になったほうがいい。それは長所だと思う。

郵便的という概念は全く哲学的ではない。それは現実の世界にはみ出してしまっている。哲学というものは、言葉の世界に閉じこもるためのものである。現実を捨てて、プラトニックなアイデアの世界に逃げ込むための手段に過ぎない。彼は全く無自覚にそれを壊そうとしている。どう考えても、彼は哲学者ではない。

彼は自分自身に無自覚であるというよりは、哲学が何であるかと

いうことに気付いていないのかもしれない。ヨーロッパの思想や哲学は、彼が考えるほど高尚なものではない。

2

批評の歴史は古い。私が思うに、日本において批評の文化が花開いたのは江戸時代である。そのころは朱子学が盛んで、論語などのテキストへの注釈が様々な学者によって行われた。おそらくそれが、文芸批評の原点であろう。

批評の対象が同時代の創作物であるか古典であるかという違いはあるものの、活動の中身はあまり変わっていないと思う。テキストの読み方を深めてゆくことによって、新しい見方や思想を発掘する、という批評の本質は現代にも受け継がれている。

東の批評はわりとべたというか、作品から道徳的な意義を読み取ろうとすることがあって、どこことなく堅苦しい。江戸時代で言えば、伊藤仁斎のような真面目な読み手である。

一方で、宇野常寛は作品を斜めから読む。メタな視線から身もふたもない読解をするので、ある意味では不真面目だが、それが逆に新鮮でもある。荻生徂徠のような癖のある読み手である。

最近あまりサブカル批評なども流行らなくなってきたので、昔を懐かしむ気持ちから、ついこんなことを書いてしまった。

3

私は、未来は子どもたちに託せばよい、という議論が好きではない。子どもの可能性に期待しているのだろうが、人任せにしないで自

分でなんとかしろ、と思ってしまう。子どもにすればいい迷惑ではないか。

子どもには自分の意見を表明する手段がない。それをいいことに、大人は自分たちの不始末の責任を子供に押し付けようとする。それは一種の搾取である。何かいいことを言っている感じにはなるが、実際には無責任極まりない発言である。

4

ハイデガーは、哲学者としてよりも古典研究者として優れていたと思う。彼の学問は常に、ギリシャ哲学やスコラ哲学の研究の上に成り立っていた。だからこそ、独創性のある思想を作り上げることができたのである。

日本の哲学研究に足りないのはスコラ学である。スコラ学は近代哲学の基礎をなしているのに、それが理解できていないと応用が効かない。日本の哲学が欧米の後追いにしかないのは、そのあたりに原因があるのではないか。

そもそも、日本語で利用できるスコラ学の文献が少なすぎる。カントやヘーゲルの文献は揃っているが、トマスやアヴィセンナはほとんどない。しかし、後者をしっかり学ばなければ、西洋の哲学を理解できなくなる。

日本の哲学者は表面的な流行ばかり追いかけていて、基礎ができていない。もうちょっと歯ごたえのある仕事をしてほしいものである。

『君の名は』

『君の名は』は確かに面白かったが、私が期待していた新海作品とは少し違った。たぶんアニメファンならば、新海誠にはそれぞれ何か期待していたものがあつたと思うのだが、あの映画はそのどれとも異なっていたのではないか。

彼の作品には独特な気持ち悪さがあつて、それが私は好きだし、私以外にも気に入っている人は多いと思う。おそらくそれは、百年前のSFのセンスではないか。たとえば『星を追う子ども』には、ジュール・ヴェルヌやコナン・ドイルの作品に感じられるような、何となくすっきりしない不気味な雰囲気があるように思う。映画は全体的にジブリ作品を意識していたようだが、映像から滲み出す不気味さがそれを台無しにしている、はつきり言って面白くなかった。

『君の名は』は、その不気味なセンスをうまく消して成功したと思うのだが、私としては、それをもっと前面に出してほしかった。彼自身は分かりやすい恋愛ものがやりたいのかもしれないが、青春とか恋愛とかの要素は一切捨てて、本物の怪奇小説を作してほしい。

そもそもSFというのは不気味なものを描くのが目的であつて、それは、理性では捉えきれないものをどうにかして理性によって捉えようとする、そういう営みである。百年前のSF作家たちは、それを表現するために怪奇小説という手段をとった。しかし、SFはやはり馬鹿にしか書けないもので、なんでもかんでも理性で割り切ろうとする小利口な人間にはSFはできない。

彼には一度ステイブン・キングのような怪奇ものを作ってみてほしい、と、いちファンとして思う。

仏教徒は神に祈るべきか

1

日本では神仏習合があたりまえだったので、仏教徒が神に祈ることもそれほど珍しくない。しかし、スリランカから来た坊さんなどは、やはり奇異に思えるらしい。

まず基本的な言い訳から始めれば、日本の神様は仏教の守護神だということになってるので、仏教徒が神に祈りを捧げても問題はない。間接的に仏陀に祈りを捧げていることになるからである。

また、日本人は神様といっても、何か超越的なものに祈りを捧げているという感覚はない。恵みをもたらしてくれる山に感謝する、といった感覚に近いのではないか。

目に見えないものが存在すると考えるのは別に不思議なことではなくて、カビの胞子やなんかも空气中を漂ってはいるが、目には見えない。神様というのもそれと同じで、ただカビよりは人間に近いから、礼儀を欠かすわけにはいかない。日本人にとっての神様は、多分そういうものではないだろうか。

たしかに目には見えないので、存在するかどうかは分からない。しかし、昔の人はいると言っているので、それを無視するわけにもいかない。いないないないと思っていたけど実はいた、ということになれば、それまでの非礼を咎められるかもしれない。そう考えると、とりあえず祈っておいたほうがいい、ということになる。

だいたい日本人というのはそんなものである。いてもいなくても困らないような行動を取るので、実際どっちであろうが大して気にしない。その上、どっちでもいいと言うと角が立つので、どっちでもいいとも言わない。だから、見た目には敬虔に見えることもある。

2

日本人は、いる・いないという判断をあまりしない。二択に答えることはできるだけ避けようとする。どっちかに決めてしまうと、逆が正解だったときに困るからである。

また、それに答えることで、取る必要のないリスクを取らされてしまうこともある。そもそも、その二択が間違った前提に基づいている場合、どちらを選んでも不正解ということもありえる。だから二択を迫られた場合は、できるだけ答えを引き伸ばすのが正解だ、と言えなくもない。それが日本的な打算であり、ある種の合理性である。

日本人の神に対する態度は、そういう打算に由来すると思われる。打算が敬虔に似るといふ奇妙な状況である。

3

こういう優柔不断な態度は、日本以外の文化では良くないことと見なされるかもしれない。

しかし、判断の引き延ばしを肯定的に評価する場合もあって、たしかマハーバーラタの解脱法品に「悠長なる者チカーリン」という話があったと思う。この話には、バラモンの夫婦とその息子チカーリンが出てくる。あるとき、父が怒って母を殺すように息子に命じて、そのまま旅に出てしまう。

ヒンドウー的な価値観では父親の権威は絶対的なものであり、さらに、バラモンの師匠の命令も絶対的なものである。ゆえに、父であるバラモンに弟子として仕える息子としては、その命令を無視するわけにはいかない。しかし、子どもとして母を殺すわけにもいかない、と延々悩み続けている間に、父が帰ってきて、さっきのは間違いだった

た、と告げる。優柔不断なチカーリンは、その優柔不断さゆえに良い結果をもたらした、という話である。

この比喩は非常に巧みなもので、ここから様々な考察を導くことができる。西洋人はここで、父の考えが間違っているはずはない、と考える。だから、どちらかに決めなければならない、という一種の神経症に陥りやすい。

一方で、日本人は間違いの可能性を信じている。間違った判断もありうる、と思っているので、曖昧な態度でお茶を濁すこともある。これを甘えや幼稚と捉える人もいるかもしれないが、私は狡猾と言ったほうがいいと思う。名よりも実をとる人々である。

4

仏教は超越的なものをすべて否定する。超越的なものを信じることが宗教だと考える人もいるが、そういう見方をするならば、仏教は宗教ではない。

超越的なものを信じるということは、世俗的な人間に特徴的なことである。それは、自分には原理的に判断ができない問題について、それにもかかわらず無理矢理判断を下す、ということである。そういう人間を凡夫というのであって、ヨーロッパで宗教的と言われる人はみな、仏教ではただの愚か者である。

ゆえに、日本人は誰も信仰を持っていない。それが仏の教えだからである。

戦争責任と慰霊

1

日本人はもしかすると、加害者と同化することによって、自分が被害者であったことを忘れようとしているのかもしれない。

日本はかつて欧米による侵略の被害者であった、というか被害者になりかけた。結局、戦争によってそれを退けることができたのだが、その被害者としての記憶を忘れるために、自分は加害者だと思いつまうとしているのではないか。

だが、実際には日本は被害者にならなかったし、積極的に加害者であつたわけでもない。だから、加害・被害という構図にこだわる必要はないのだが、なかなかそこから抜け出せないらしい。ヨーロッパ的な考え方をしていると、どうしてもそういった二元論から抜け出せなくなってしまう。一度それを忘れてみるべきである。

とくに、中国との戦争を加害・被害という二項対立で捉えようとすることは、全くの見当違いである。中国人には対外戦争という観念はない。すべての戦争は内戦である。つまり、我々は中国の内戦に参加したのであって、外国勢力として中国を侵略したわけではない。そういう見方が成立するのは、近代中国が成立した後の話であり、その近代中国の建設そのものに日本が関わっていたわけではない。

いまの中国人が侵略云々と言うのはプロパガンダであって、それを真に受ける必要はない。そもそも中国など存在しなかったのである。レイプ・オブ・ナンキンとはしかに存在したと思うが、戦争というのはそういうものであって、あまりナイーブに捉えるべきではない。むしろ、日本人の道徳心の低下は反省すべきことではあるが、謝罪するしない、といった単純な問題ではない。謝罪をするなら、南京城を

守り切れなかったことを、国民党が中国人民に対して謝罪すべきである。滑稽極まりないことだと思うが。

それが滑稽であるのは、国民党中国が近代国家ではなく、中国人民の代表ではなかったからである。では、中国人民の代表は他に存在したのかといえば、そんなものは存在しなかった。本当は、日本軍がそうなることもできたはずである。

加害・被害という二項対立は西洋人特有の分かりやすいフィクションであり、現実とは全く関係のない言葉遊びに過ぎない。

2

GHQは本当に馬鹿なことしかない連中だったが、新仮名遣いの害が一番大きかったのではないか。そのせいで、日本語はずいぶん使いづらい言語になったと思う。

漢文の読み方を多少でも知っている人間なら、中国というものがどういうものなのか、何となくわかるはずである。日本語と漢字のかかりは非常に深いものだったので、昔の日本語を使う人間は、今の人よりも漢字の使い方に詳しかったと思う。しかし、新仮名は日本語と漢文を切り離す作用があったので、日本人には中国のことがよく分からなくなってしまう。

東京裁判で滑稽なことは、欧米の判事たちが、中国の状況に全く無知であつたらしいことである。それもそのはずで、漢字が読めない人間に、中国のことが分かるはずもないのである。逆に言えば、戦前の日本と中国のかかわりを考えるためには、漢文や旧仮名遣いの文章をある程度読めなければならない。

私も漢文は独学で、仏典ぐらいしか読むことはできないが、それでも漢字の持つ力はなんとなく理解できる。最近は漢字に疎い人が多

く、それが歴史の理解を妨げている部分もあると思う。

中国語は一つの言葉ではない。おそらく無数の言語の集まりが、漢字という宇宙を形成しているのだと思う。たとえば、仏典を記述するための漢文と、儒学の議論をするための漢文は、たぶん文法からして異なる。全く別の言語である。そういうふうに、それぞれの分野や時代によって、互いに異なる漢字の体系が存在し、それら漢字の体系の集合が、全体として中国語というものを構成しているのではないか。

誤解を恐れずに言うと、日本語や英語が人間の言葉だとするならば、漢字は神の言葉である。それぐらい次元が違う。

3

いまでもGHQを崇拝している人はいて、彼らに言わせれば、GHQは日本に民主主義を根付かせたから偉いのだそうだ。だが、民主主義というのは何のことはない、ただの多数決である。なんでただの多数決をそんなにありがたがるのかよく分からないが、どうもこれは一種の宗教であるらしい。つまり西洋人にとっては、ただの多数決が、何かとても崇高で価値のあるものに見えているようなのである。鰯の頭も信心からと言うが、迷惑なものを日本に持ち込んでくれたものである。西洋人はおかしな宗教を次から次へと発明する。

4

三百万の日本人はたしかに無意味に死んだ。それは、本来必要なかったという意味での無意味であつて、全く何の意味もなかったわけではない。

アメリカ人は、自分たちがなぜ日本人を殺したのかを理解していない。あの戦争の意味も結果も何一つ理解していない。日本人の死の無意味さは、アメリカ人が意味もなく日本人を殺したことからくる。

三百万の日本人は、アメリカの侵略を退けるために死んだ。だが、当のアメリカ人にはその自覚がない。彼らには、それを理解するための知性が欠け落ちている。

我々があの戦争の死者を追悼するためには、アメリカ人に、彼らがしたことを自覚させ、謝罪させなければならない。それ以外に死者を追悼する方法はない。そのために、アメリカ人がそれを理解できるようにするまで、我々が教育してやる必要がある。それが本当の慰霊であらう。

復興と経済

1

東日本大震災から八年が経ったが、被災地の復興は遅々として進んでいない。

私思うに、原因は過疎化である。被災した地域の大部分は震災前から過疎化が進み、経済が回らなくなっていた。そこへ震災が起きたせいでさらに人口が減り、これらの地域は回復不可能なほどの打撃を受けている。

だから、被災した地域を元に戻すだけでは、問題を解決することはできない。震災前の姿に戻っても、町は壊れたままである。本当の復興のためには、新しく経済を作り直さねばならない。それが、これらの課題である。

2

ここに現れる問題は、都市と農村の関係を反映したものであり、近代を通じて問題とされてきたものであるが、おそらくその起源は人類の歴史と同じくらい古い。

人間が生きるためには食料が必要である。ゆえに、食料を生産するために農業が必要とされる。しかし、農民も農村の中だけで自給自足ができるわけではない。酒や塩は他から手に入れねばならない。

そこで、様々な生産者の間で商品の交換をするために、商人が必要とされる。商人は様々な土地を渡り歩き、交易品をやり取りするために市を立てる。市が立つ場所や日付が決まると、農民のほうから市場へ出向き、作物を売り、日用品を買うようになる。やがて市が常設されるようになると、都市ができ、そこに多くの人が集まるようになる。そして人が人と呼ばれ、都市はさらに大きくなる。

岡田英弘によれば、人間にとって一番の娯楽は人間である。おそらくこれは、都市の成り立ちに対する最良の説明になりうる。たとえば、むかし砂漠の中で旅をしていた行商人は、オアシスに着くとほっとしただろうと思う。オアシスには町があり、人がいる。市場には商人が集まり、それを目当てに芸人も来る。酒場に行けば様々な話し声がして、喧嘩もあればロマンスもあっただろう。そういった光景が旅人の心を潤したはずである。それは、現代風に言えば娯楽ということである。

合理的に考えれば、都市を作らなくても商売をすることはできる。ゆえに、人間が都市を作る理由は合理的なものではありえない。娯楽のため、ということも説明としてはありうるだろう。それは人間の生活にとって欠かせないものであるから。テレビというのもこれと同じで、テレビに出ている人の中には、現実には関わりたくないような者

も多いが、そういう人間でも、はたから見ている分には十分に楽しめるのである。

人は娯楽を求めて都市を作る。互いが互いを娯楽にするために、人は集まる。そうしていったん都市ができてしまうと、都市に集まるのは商人であるから、自然と金も集まるようになる。そうすると、金のある都市と、金のない農村の間に立場の違いが生まれてしまう。いきおい、農村よりも都市の方が立場が強くなってしまふのである。

しかし、都市の生活を支えているのは農村である。都市は何も生産しない。都市で消費されるものは、すべて農村で生産されたものである。また、都市は狭いが、農村は広い。都市というものは、農村という大海原に浮かぶ小島のようなものである。

だが、都市で生活する者にとっては、都市の内部で生活が完結してしまうので、都市の外部を意識することがなくなってしまふ。それが進むと、都市の商人たちが農村の事情を顧みず、農村を搾取するという状況が生まれる。そうなるや農民の間に不満が溜まり、一揆を起したり反乱を起こしたりする。

おそらく、ここに政治の起源がある。政治というものは、都市と農村の矛盾を解消するために存在するのではないだろうか。都市と農村の利害対立を調停し、両方の地域を含めた全体として、経済活動が円滑に行われるように調整することが政治の役割なのだと思う。

3

被災地において露わになった問題は、人間にとって最も古い問題であり、かつ、最も政治的な問題である。言い換えれば、被災地を経済的に復興することができるかどうかは、純粋に政治的な問題である。ゆえに、この課題に対する取り組みによって、政治の価値が決定され

るだろう。現在までのところでは、日本の政治はその機能を完全に停止していると言わざるを得ない。

政治の役割とは、経済を育て、それを維持してゆくことである。そして可能ならば、それを世界中に押し広げてゆくべきである。平和はそこから生まれるだろう。

4

最近の世間では、放射能を何か神秘的なものだと考えたり、それをタブー視したりしているようである。しかし、実際はそれほど特別なものではない。

放射能とは、原子の崩壊のことである。原子は崩壊するときに微小な粒子を放出し、それが放射線と呼ばれる。放射線を出す原子を放射性原子と呼び、放射線を出す能力を放射能と言う。

厳密に言えば、あらゆる原子は放射能を持っている。我々の身体を構成している原子も、いままさに崩壊しつつある。もちろん、それらの原子は崩壊にかかる時間が非常に長いので、目に見える形では影響は出ない。しかし、それが崩壊しつつあるという点から言えば、すべての原子は放射性原子である。

我々の世界を支えているのは、原子の変化である。太陽の光も原子の変化によって生み出されており、それが地球の生命を支えている。変化によってエネルギーが生まれる。あらゆる原子はいままさに変化しつつあり、それがこの世界を動かしている。

これを仏教では諸行無常という。この世界は変化によって成り立っているということである。何のことはない、すべてお釈迦様の言ったとおりである。

だから、放射能と言っても何も特別なことはないで、その性質を見極めて、適切に対処すればよい。対処不可能な問題では全くない。

5

私は子どものころに、家族と牡鹿半島へ行つてはじめて鯨を食べた。新鮮な鯨の刺身はとも旨く、不思議な味がしたものである。博物館にはミンククジラの全身骨格が展示されていて、町全体が鯨のテーマパークのようだった。その後はあまり牡鹿へは行かなかったが、いつかまた行つてみたいと思っていた。

捕鯨なんてなくてもいい、と言う人は、鯨のたを思っているのではなくて、たぶん鯨に興味がないだけなのだろう。誰も鯨を食べなくなったら、みんな鯨のことなど忘れてしまうのではないか。

街に住んでいる人はそれでいいのだろう。新しいものが沢山あるので、古いものを覚えておく余裕などないのだろう。

私はいまだに、鯨を食べると泣いてしまう。

社会を変える

社会を変えようと思う必要はない。我々が何もしなくても、それは勝手に変わる。バナナは放つておけば黒くなるし、ジャガイモは放つておけば芽を出す。それは、誰かが手を加えたわけではない。

それと同じように、この世界にあるものはすべて、それ自体の性質として常に変化し続けている。だから、何かを変えようと努力することも、あるいは変わらないように努力することも、どちらも愚かなことである。

変化は、人間にとって都合よく起きるとは限らない。もしも神様がいるとすれば、彼は人間のことでなく、他の生き物のことも同じように考えているのだろう。果物が腐ることは人間にとっては良くないことだが、おそらくハエやカビにとっては都合のいいことである。しかし、変化を利用することはできる。果物は腐りかけがおいしいので、だめになる寸前にジャムにしてしまえばよい。また、米に付くカビを利用して酒を造ることもできる。そのように、変化を利用して生活することが賢い生き方である。

政治の仕事は、社会を変えることではなく、社会が変わらないようにすることでもなく、経済を回すことである。